中高 6 年間習っても喋れない…小学英語を大人も学べ

小学校英語教育入門（その1）@上智大学公開講座

来春から小学 3〜4 年生の英語が部分的に始まるなど、小学校英語の低学年化が進んでいる。さまざまな指導法が模索されるなか、小学校英語の理念、理論、実践のエッセンスを学べる講座が上智大学で開かれている。「小学校英語教育入門」講座と名づけ、毎回、実務経験豊富な講師陣を招く輪講形式も魅力だ。

上智大学「小学校英語教育入門」講座。ゲスト講師の幡井先生

“外国語活動”は小学 3 年生から。5 年生からは“教科「外国語」”に

小学校で英語教育が始まったのは2008年度、小学5・6年生を対象に、「聞く・話す」が中心の「外国語活動」として始まった。2011 年度にはそれが必修化された。そして 2020 年度にはさらに大きく変わる。

まず、**「外国語活動」の必修化が小学 3・4 年生に引き下げられる**。さらに**小学 5・6 年生の英語には「読む・書く」も加わり、正式な「教科」となる**。

「外国語活動」としての目標は、コミュニケーションを図る素地となる資質や能力を高めることだ。つまり、あくまで楽しみながら英語に触れることに主眼が置かれていた。それが「教科」となると、そうした資質や能力を実際につけさせることが目標となる。検定教科書も作られ、成績をつける必要も出てくる。

小学英語の低学年化が進むなか、文科省は 2014 年度から外部専門機関と連携して「英語教育推進リーダー中央研修」を実施し、英語教育推進リーダーを養成している。取材した日の講師を務める、昭和女子大学附属昭和小学校英語科主任の幡井（はたい）理恵先生も、その一人である。

中高 6 年間習っても英語が話せない理由

英語には次の 4 技能がある。

リスニング（聞く）
スピーキング（話す）
リーディング（読む）
ライティング（書く）

まず、幡井先生は講座の中で、日本人が中学高校を通じて 6 年以上英語を習いながら、英語が話せない理由を、リスニングを例に語る。

「『英語教科で、何を勉強しましたか？』と聞くと、多くの人が『単語を覚えること、それから文法のルールを覚えることを勉強しました』と答えます。『ではリスニングしましたか？　どういうリスニングでしたか？』と尋ねると、その多くは教科書の内容を CD で聞くようなリスニングです。通常の会話のやりとりを聞くことのないケースがほとんどです」

ではリーディングについてはどうだろうか。

「『授業では何を読みましたか？』と聞くと、『教科書を読みました』と答える人が多いです。でも教科書を読むときは、自分で辞書などを調べて日本語訳をつけてから読みますよね。内容がすでにわかっているものを音声化しているだけで、本当に“読んでいる”のではないんです」

スピーキングやライティングも同様で、**従来の指導法が『使える英語』につながらないのは、知識を頭に入れることばかりに重きを置いて、実際に使う訓練をほとんど行ってこなかったから**だと、幡井先生は言う。

すでに習った内容を、英語で学び直す

小学校で英語を教えるようになった背景には、学校教育でこれだけ英語を学びながら、使う機会がないために、知識で終わっていることへの反省があるという。そこで、学んだ知識を「使う」ため、幡井先生が進めているのが「**教科連携**」といわれる指導法だ。（教科連携の実際の様子は「こんなふうに習いたかった最先端小学英語の模擬授業」の記事へ）

これは、他教科ですでに学習した内容を題材として活用し、「聞く・話す・読む・書く」の 4 技能を高めることをねらう。全教科を担当する小学校教員だからこそ、教科を超えて英語指導に生かすことができる。

似たような手法に「**CLIL**（Content and Language Integrated Learning　クリル）」というものがあるという。これは、文法構造が英語に似ているヨーロッパの非英語圏を中心に始まった指導方法で、現在は日本でも注目されている。算数や社会などといった教科の内容を英語で学ぶことで、両方の学習を一緒に行うものだ。教科学習と語学学習の割合はほぼ半々で、「英語で教科内容を学ぶ」ことに主眼が置かれる。

これに対し、教科連携では、主眼はあくまで「英語を使う力をつける」こと。そこに教科の既知の学習内容をエッセンスとして加えることで、学習者の関心を引き出そうとする点が異なる。すでに習った内容であれば、英語学習に教科のエッセンスを入れられる。言ってみれば、理科や算数の学習内容を英語でもう一度、触れてみようというものだ。

「教科学習も英語学習も全部つめこんでしまうと、子供たちはいっぱいいっぱいになって、英語嫌いになってしまいます。小学英語で一番大切なのは、英語を好きになることです。そのため教科連携といって、CLIL という言葉は使っていません。ただ CLIL は今、注目を浴びている指導法なので、概念だけでも知っておくと便利です」（幡井先生）

この教科連携の背後にある考え方について、幡井先生は今年 3 月に発表された学習指導要領の草案について語った。

知識を持っているだけではダメ

新学習指導要領では、英語だけではなく、どの教科も同じことを目標にして子供を育てていこうとしているという。それは、

(1)**何を知っているか、何ができるか**
　→知識・技能
(2)**知っていること・できることをどう使うか**
　→思考力・判断力・表現力
(3)**どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか**
　→主体的に学びに向かう力

である。つまり、**知識や技能を持っているだけではだめ、持っていることを使って、生かしていこう、そして人生を歩んでいこう**、ということだ。

子供たちが教えたり教えられたりする学習を

英語学習における教科連携が重視されているのも、この考え方からだ。その理論的基盤として、認知・教育学者のハワード・ガードナー教授（ハーバード大学教育学大学院）による多重知能理論があるという。

子供にはさまざまな能力がある。言葉に強い子供もいれば、体で表現するのが得意という子供もいる。まわりの空気を読んで行動する子供もいれば、自分のやりたいことを追求する子供もいる。そこで、ガードナー教授は、子供のもつさまざまな知能を 8 つに分類した。

(1)**言語的知能**
(2)**論理数学的知能**
(3)**音楽的知能**
(4)**身体運動的知能**
(5)**空間的知能**

(6)**対人的知能**
(7)**内省的知能**
(8)**博物学的知能**

今までは英語指導の際に言語的知能だけに意識が向けられてきたが、もっと多くの知能に着目して子供の能力を開花させていこうという考え方だ。 いま注目されている「**協働学習**」も、子供たちがお互いの能力の違いを認め合いながら、互いに教えたり教えられたりして学んでいくことができる、一歩先を行くグループ学習だ。

幡井先生はこれを英語の授業にも生かしていきたいと語る。その模擬授業は、「私もこういうふうに英語を学びたかった」と思えるものだった。

（模擬授業については、「こんなふうに習いたかった最先端小学英語の模擬授業」の記事へ）

文・写真／小島和子（講義風景）

こんな風に英語を習いたかった！最先端小学英語の模擬授業

小学校英語教育入門（その 2）@上智大学公開講座

上智大学で開催されている「小学校英語教育入門」講座には毎回、指導経験豊富な先生がゲスト講師として招かれている。取材した日は、昭和女子大学附属昭和小学校英語科主任の幡井理恵先生の模擬授業が行われた。受けた感想は、「こんな授業を受けたかった！」の一言だ。（「中高 6 年間習っても喋れない…小学英語を大人も学べ」参照）

全身を使って小学英語の模擬授業を行う幡井先生

複数形の「s」はこうして教える

幡井先生は、文科省が実施する「英語教育推進リーダー中央研修」で養成された英語教育推進リーダーの一人だ。現在は昭和女子大学附属昭和小学校の英語科主任として、毎日小学生に英語を教えている。

幡井先生が授業に取り入れているのが「教科連携」だ。これは、他教科ですでに扱ったことのある内容を題材とし、「聞く・話す・読む・書く」の 4 技能を高めるものだが、どういうものかは、上智大学「小学校英語教育入門」講座で行われた次の模擬授業を見れば、一目でわかる。講座に集まった“大人たち”に、幡井先生は呼びかけた。

「皆さん、小学 5 年生になった気持ちになって受けてください！」

まずは生活・理科との連携からだ。幡井先生は下のスライドを見せ、質問を投げかけた。

「**What kind of flower is this?**（これは何の花？）」（幡井先生の英語の発言はエンジ色。以下同）

幡井先生は言う。

「子どもたちはたいてい、わからないといった顔をします。そして英語で様々なヒントを与えた後、子どもたちが何の花か分かり始めた頃に次の写真へと転換すると、ワアーっと歓声があがるのです」

「**Grape!**」
「**Not only one. Many, many.**」

「子どもたちは最初、単数で答えます。そこで、1 つではないことを伝えて、子どもたちが気づいたところで正解を伝えます」

「**Grapes.**（s の音を強調して）」

「このやりとりで、複数形のときには最後に “s” をつけるという知識が実感とともに体得できます。さあ、次は “色” の表現を知る授業ですよ」

色もクイズで覚える

「**What are these？**」
「ピーマン！」
「**Yes, peppers!　What color are they？**」
「**Green！**」
「**Really？**」

（子どもたちからいろいろな色が英語であがります）

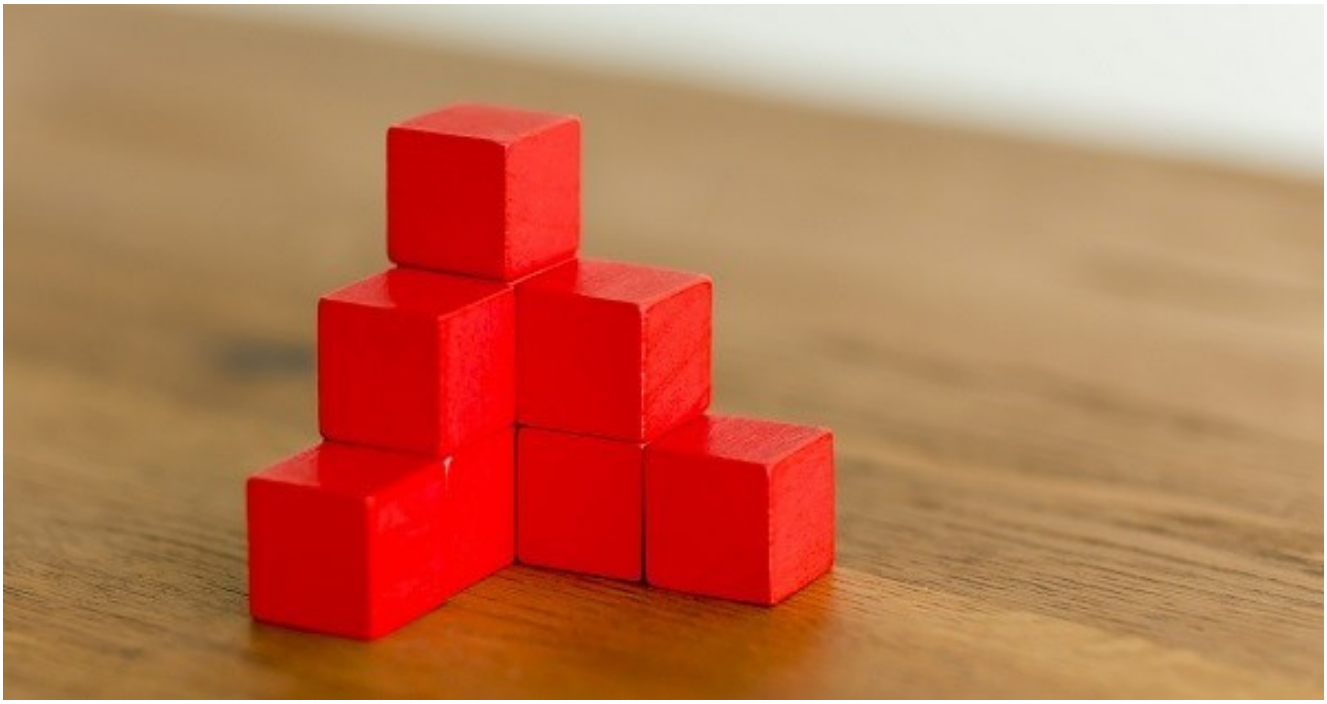
「**Red！**」
「**Yellow！**」
「**Green！**」

「ここで次の写真を見せて、子供たちから歓声があがったらしめたものです。そして再度色を英語で確認します」

「色を教えるときには、ちょっと複雑な色を教えるのもよいですね。たとえば wine red（ワインレッド）や light blue（ライトブルー）。2 つの語をくっつけると別の単語になることを教えられます」

数字を英語でブツブツ言えるようになれば

「算数との連携には、次のような積み木の絵も効果があります」



「**Let’s calculate! How many? What’s your idea?**」
（数えてみて。いくつあると思う？）
「**Eight!**」

「**Nine!**」
「**How do you calculate?**」
「**Five plus three plus one！**」
「**Same idea？**」
「**Three plus three plus three !**」

「数え方を聞くことは、その子の考え方を聞くことになります。背景まで数える子もいれば、表に見えている数だけを答える子もいます。また、その数え方も、下の段から数える子、端から数える子とさまざまです。それぞれ違う考え方の表現を学ぶことも勉強になります」

積み木をさらに増やせば、もっと複雑になるという。複雑になればなるほど、ブツブツつぶやいたりする子が出はじめる。数字を英語でつぶやき始めれば大成功だ。

「大人でも、**fifteen** と **fifty** の聞き分けができない人はたくさんいます。この要因の一つは、英語の数字に慣れていないからです。ブツブツ英語でつぶやくことは、数字に慣れるためにはとても大切なことです」

さらに掛け算なども加えていくと、算数としても英語としても、高度になっていく。大人でも、掛け算・割り算を英語でどう言えばよいかわからないのだから、これを小学校からやれば生きた英語が身につく。

絵を描くのが得意な子は問題を作る

上の授業は、英語学習としては「**How many～？**」という表現を身につける機会になるが、もちろんそれだけではない。

昭和小学校では、こうした課題をグループで考えさせることが多い。すると、立体図の裏側に隠れているブロックも数に入れるべきかどうかなど、仲間と相談する場面が出てくる。自分とは違う数え方をする人がいることがわかり、**仲間と協調しながら考えを深めるという経験**につながるのだという。

また、こうした図形を参考にして、「今度は自分たちで問題を作ってみよう」と、グループに課題を与えると、算数は苦手だけど絵を描くのが得意な子は、率先して問題をつくる。**子供たちは大人が教えなくても自分の得意なことでチームに貢献するようになる**。

算数に強くなるだけなら、そろばんをマスターさせたり、塾に通わせたりすればいいのかもしれない。だがそろばんを買えない子どももいるだろうし、すべての家庭で塾通いができるわけではない。学校教育では、どのような子どもにも学びの機会は平等にある。

「教科連携を通して、日本中のどんな子どもたちも輝ける機会をつくりたいんです。発達段階に合わせ、徐々にその世界を広げてあげたい」と幡井先生は熱を込める。

小学校低学年なら家の周り、中学年は住んでいる町

幡井先生の模擬授業の最後に登場したのは、東京都の地下鉄路線図。もちろん英語マップだ。

「**英語の地下鉄路線図は、ローマ字を覚えるのに便利**なんです。ローマ字を一番使うのは地名人名ですよね。しかも子供たちは乗り物が大好きですから、喜んで読んでいきます」

これについて、本講座のコーディネーターを務める上智大学短期大学部英語科准教授の狩野晶子先生はこう語る。

「子供は発達段階にあり、まだ抽象概念を完全には理解できません。自分の関心のあることにしか興味を持たないし、理解しないのです。その範囲は、小学校の低学年（1,2 年）なら自分の家の周り、中学年（3,4 年）くらいで自分の住んでいる町、そして高学年（5,6 年）で市町村から都道府県くらいまで実感を伴って分かってきます。**子供たちの発達に応じて、その世界を徐々に広げながら英語学習に結びつけていくことが大切**です」（狩野先生）

子供にわかる英語にして教えることが大切だが、それはけっして、不自然なほどゆっくり喋ることではなく、子供がふだん触れていそうな言葉にして話すことだという。

「**高学年になればなるほど、英語以外の内容が興味のわくものでないと、子供たちは英語を覚えなくなります**。なので、教科と英語を一緒に教えるのはとてもよいことです。今日の授業も、一見、むずかしく思えるかもしれませんが、子供たちはむずかしくてもわかるんですよ。**子供の難しさと大人の難しさは違います**。どこまで押していいか、どこまでチャレンジしていいか。それが、小学校の先生の力の発揮しどころです」（狩野先生）

〔前の記事〕中高 6 年間習っても喋れない…小学英語を大人も学べ

文／小島和子　写真／小島和子（講義風景）、SVD（植物）、fotolia（積み木）、(c) japolia / fotolia

注目の使える英語力指導法 CLIL は「英語で学ぶ」

【Interview】狩野晶子先生（上智大学短期大学部英語科准教授）

学校英語はムダ！話せるようにならないじゃないか――こうした批判をよく耳にする。そんな汚名を挽回すべく、英語教育の世界ではいま、新たに「使える」英語力養成を目指した「CLIL（クリル）」と呼ばれる教育法が脚光を浴びている。

世界トップクラスの名門として知られるアメリカのハーバード大学

ハーバードやイエールを目指し始めた名門高校

東大合格者数ナンバーワンを誇る開成高校から今年、ハーバード、イエール、プリンストンといった海外大学の合格者が 20 名も出たことが話題になった。上智大学短期大学部英語科准教授で、上智大学公開講座「小学校英語教育入門」をコーディネートする狩野晶子先生はこう語る。

「海外の大学を視野に入れている中高一貫校などの場合、中学受験に英語を課す動きも出てくるはずです。その場合、文法理解より重視されるのは、おそらく**臆せずコミュニケーションする力**。自分で考え、わからないことは質問したり仲間と相談したりできる、**総合的な言語力**を測ることになるでしょう」

それこそ **CLIL** が目指すものだ。CLIL とは、科学や歴史といった各教科を母語以外の言語で学ぶ教育法で、正確には「**内容言語統合型学習**（Content and Language Integrated Learning）」と呼ばれる。EU

の言語政策の一部として、ヨーロッパで 1990 年代半ばに提唱され、現在では欧州各国で取り入れられている。

科目内容（**Content**）と**語学力**（**Communication**）を同時に獲得し、さらには、批**判的・論理的な思考力**（**Cognition**）、**協同学習**（**Community**）も重視されている。この「**4 つの C**」をバランスよく育成するのが CLIL の特徴だ。

理工学部で、洋書の化学の入門書を使った授業

日本の大学で CLIL の最先端を走っているのが上智大学だ。初めて CLIL プログラムが開講された 2010 年度は、定員を大幅に上回る受講希望者が殺到。2014 年度からは正式に1年生の必須科目に組み込まれた。

例えば理工学部では、洋書の化学や生物の入門書を使った授業が行われている。教員は英語教育ではなく化学や生物の専門家だ。必ずしもネイティブの教員である必要はない。特に理工系の分野では、以前から英語が世界共通語。英語の論文を読み書きする機会が多く、留学経験があるような教員揃いだ。このようなカリキュラムの中、英語の授業は CLIL のアプローチに根ざして行われている。

狩野先生は、「私は英語にはもちろん強いほうですが、化学や生物のテキストを見せられてもチンプンカンプン。深い内容は教えられません。**各分野の専門の先生方に担っていただき、その分野の英語と、英語自体の学びを結び付けていくことに、 CLIL の意味があります**」。

小学生に英語を教えられる教師（教員）が少ない

2020 年からは小学校英語も本格化する。ここでも CLIL 的な指導法を期待したいところだが、ネックは教員不足。小学校教員は大学の教職課程で英語指導法が必修ではなかったため、自信を持って教えられる教員が少ないのが現状だ。

「ご自分が中学校で習った勉強法のイメージを持っている方が多いのですが、中学生と小学生ではまるで違います。例えば中学英語の最初に習う be 動詞は、一般動詞より不規則に変化しますから小学生には難しい。疑問文にするときは主語と動詞をひっくり返す、というルールも抽象的すぎて腑に落ちません」（狩野先生。以下「　」内同）。

たしかに。英語に限らず、フランス語でもドイツ語でも、**英語の be 動詞にあたる動詞がもっとも複雑に活用し、学習者を悩ませる**。狩野先生は、**基本動詞ほど、活用も発音も不規則になる**という。

「たとえば、基本中の基本動詞である“do”。これを“ドゥー”と発音するのは、それを知っているから。知らなかったら“ド”と発音するでしょう。その 3 人称の“does”も、英語の発音ルールでは“ドゥーズ”です。でももちろん正しくは“ダズ”。基本動詞ほど難しく、奥が深いのです。これを真正面から教えては、英語嫌いを作ってしまいます。そこで、英語に初めて接することになる小学校の現場では、自然にそういったことを覚えられるよう、工夫しながら教えていくことが求められます」

こうした課題を抱えつつも、2020 年はもう目前。大学教育が変わり、小学校英語も始まれば、間にはさまる中学・高校の英語教育も変わらざるを得ない。

「今の変化は、小学校から大学まで、すべての英語教育の過程で、コミュニケーションの道具としての英語という位置づけを確立するチャンス。なんとかその方向に持っていきたいですね」

文／小島和子　写真／小島和子（講義風景）、(c)Bastos、(c)TungCheung / fotolia